

今なぜ古文獻の原本調査が必要か

佐々木 勇 (広島大学)

○、文献資料を多く遺存する日本 ― 本発表の目的 ―

日本語史の研究資料は出尽くした、と思われているのではなからうか。

しかし、古代の遺存物に文字が書かれていれば、それは日本語史の研究資料となる。よって、日本語史研究のための未活用資料は、大量に存する。その未活用資料によって、古代日本語における裏打ちが無いと考えられてきた言語事象の用例が見出される可能性が存する。

古文獻を大量に伝存する日本在住の研究者は、原本から得られる学術情報を学界に広く発信すべきである、と発表者は考えている。また、その古文獻の保存にも努めなければならない。

本発表では、まず、古文獻を活用した研究の環境整備が進んでいることを指摘し、原本では、複製物に加えて何がわかるのかを述べたい。

一、古文獻を研究に活用する環境整備の進展

日本語史研究の対象資料である古代語の電子化テキスト(データベースおよびコーパス)と古文獻画像との公開は、日々進んでいる。

その時々々の現時点が、原本作成時にもっとも近い時である。そのため、何らかの形で時々々の原本の姿を保存することは、今後の研究にとって欠くことができない。

複製本の方が原本より遙かに良い状態である本も存する(天治本『新撰字鏡』など)。

また、原本が失われたものは、複製本や写真に依るしかない(『東大寺諷誦文稿』など)。三巻本『色葉字類抄』前田家本の欠を補うために黒川本『色葉字類抄』を利用することや、貫之書写本の姿を知るための青谿書屋本『土左日記』の活用などは、近世の複写本を「複製本」として利用している例である。

発表者も、複製本・原本画像・現行文字による印刷本や電子化テキストの価値を高く評価する者である。以下、古文獻を研究に活用する環境整備の現状について、項目を分けて簡単に触れる。

1. 古文獻のデータベースおよびコーパスの公開

国立国語研究所・国文学研究資料館などを中心に、著名な古文獻のデータベースおよびコーパスが公開されてきた。今後、これらを活用した日本語史研究がますます盛んになることであろう。

ただし、当該データベースおよびコーパスの依拠本を理解し、不明な点はテキスト本文やその底本である古写本・版本に戻って確認することは、今後も常に必要である(1)。

2. 古文獻の画像公開

古文獻の所有者と編者・出版社との御努力によって、古文獻の画像公開が急速に進んでいる。

A. 写真帳

東大寺図書館は、東大寺総合文化センターの二階に移転され、平成二三年十月に閲覧業務を再開した。新たな東大寺図書館では、古文獻の写真帳(モノクロ)を事前申し込みの必要なく閲覧できる。「東大寺貴重書写真帳目録」は、『南都佛教』に連載中である。写真帳と同じ写真の複写を申し込むこともできる。蓬左文庫も、所蔵古文獻の写真帳を早くから現地公開している。宮内庁書陵部は写真での文獻閲覧が原則であり、設置してあるコピー機で写真複写が可能である。なお、漢籍については、近時、ホームページ上で精密画像が公開された。

B. カラー影印本（他のパネリストの発表が有るため、省略する。）

C. デジタルデータ

① DVD

高野山文書『宝簡集』・『増福院文庫善本集成』（高野山大学付属図書館善本集成）・『高野山講式集』などが小林写真工業株式会社から出版されている。

また、宮内庁正倉院事務所所蔵聖語蔵経巻 カラーデジタル版は、乙種写経の第四回配本が二〇一五年十一月に刊行され、第十回配本まで年一回刊行予定である。この甲種写経・乙種写経は、天平十二年御願経・神護景雲経ではない日本古写経を甲・乙に分けたものである。一般の関心は高いとは言えず、正倉院展などで展覧に供されることも多くない。しかし、平安初期以降の訓点本は、ここに編入されている。これを利用した訓点語研究が今後活発になってほしい（②）。

② ホームページ

若干例を挙げる。東京国立博物館のホームページには、「e 国宝」とは別に、TOP>>調査・研究>>画像検索のページで各種画像が公開されている。画像番号が「E」で始まるものはデジタル撮影された画像であり、二〇〇九年以降撮影分は、全頁カラー写真が置かれている。

また、龍谷大学図書館ホームページで続々と公開されている浄土真宗関係文献には、日本語史資料としても価値の高いものが多い。現在、『黒谷上人語燈録』元亨版の振り仮名を含めた翻刻および総索引を、発表者を含め数名で作成中である。近い将来に、刊行したい。

3. 画像未公開資料の複写

未公開文献の写真が研究上必要な場合には、写真複写を依頼する。博物館・美術館等でも、必要性を理解していただければ、複写が許可される。

4. 原本閲覧

A. 図書館・博物館・文庫等

当該研究の目的が原本調査以外では果たし得ないことを理解していただければ、原本閲覧が許可される。現在では、国立博物館でも、個人研究用のメモ写真撮影が原本閲覧時間内で認められている。ただし、その写真を論文等に掲載することはできない。

また、国立公文書館（内閣文庫を含む）では、閲覧時に各自持参のカメラで原本を撮影することができるとは。しかし、あくまでも研究資料としての筆写に替わる特別措置なので、三脚・フラッシュ撮影はできない。

B. 寺・神社等

寺社に所蔵されている原本の閲覧も、不可能ではない。各寺社における文献調査の情報を収集の上、願い出るのが良い。

なお、所定の手続きを経て、その貴重書の閲覧が許可されたならば、閲覧した文献によって知ることができた事実・研究成果は必ず公表すべきである。そして、原本所蔵者と閲覧に時間を割いてくださった皆様に、研究成果をお渡しせねばならない。

これらの古文書を活用して、従来の研究成果を確認するばかりでなく、これまでの研究成果を総合して古文書に接し、現代の理論による言語分析がなされることが期待される。

また、論文への画像掲載も、技術的には容易になった。原本画像によってその記号・文字・言語を示すことができれば、原本に接していない者も論文の内容が理解しやすい。ただし、部分写

真であっても、未公開資料を公表する場合は、所蔵者の許可が必要である。

二、原本閲覧によって知られること

0. 複製物が無い、複製物ではわからない文字を見る。

0. 1 複製が無い本

宋版一切経東禅寺版（未刊）・開元寺版（未刊）・思溪版（近刊）など。その他、多数。複製本が作成される「善本」には、近い相の言語が反映されているものかもしれない。

0. 2 複製物ではわからない文字

朱点・白点や角筆の文字・符号。紙背・小口や紙継ぎ部分の文字。虫損と訓点との判別。等。
○古い複製本では、朱筆の存在がわかりにくいものがある。

例）細川幸隆所持本『徒然草』（一九七八年、勉誠社文庫35・36。現在品切れ）の朱筆。

○複製物では、虫損が訓点のように見える。しかし、原本では、虫損の確認が容易である（3）。

1. 文字・言語を使用の場に戻す

原本の姿を見ることによって、文字・言語を使用・編集の現場に戻す。

① いかなる素材のどこに、何を置いて、いかに書いたか。

← 右①を手がかりとして、②が推測可能である。

② どのような場で、いかなる人物によって、誰に向かってその言語が使用されたか。

1. 1 素材・紙質・法量・装訂

○木簡の大きさ・形状

「歌木簡」A―大型の一行書き木簡は、「公式度の高い儀式・歌宴の場」、B―小型の二行書き木簡は、「それより公式度が下がる歌宴や私的な集まり」（栄原永遠男『万葉歌木簡を追う』（二〇一一年、大阪市立大学人文選書2）110頁）。

○紙質

麻紙は、「五月一日経」など、極めて重要な文献にしか使われていない。「神護景雲経」や隋唐写経の大部分は、麻紙ではなく楮紙を用いている。↓石塚晴通「東洋のコデイコロジ（Codicology）」（二〇一二年八月三十日〜九月一日、東洋文庫講習会）、参照。

○文書の素材・大きさ・書体・インク色・筆記用具等から見た古文書学。

Jean Mabillon (ジャン・マビヨン) 著・宮松浩憲訳『ヨーロッパ中世古文書学』（二〇〇〇年、九州大学出版会。原題『*De re diplomatica*』1709年第二版の邦訳）、参照。

○「有年申文」は、「讃岐国司解」の端に書き込まれた「インフォーマルな添え書きである」。
（小松英雄『日本語書記史原論』（一九九八年、笠間書院）321頁）

1. 2 紙背の文字・包紙・帙・箱・購入記録・先人の文献調書

おもて表の本文と無関係であっても、紙背文書・紙背典籍等が、表本文の書写者・書写時等を知る材料となる。また、包紙・帙・箱に、当該文献の書名や伝領者・来歴が記されている場合がある。購入時の記録や、旧蔵者の書簡、あるいは、その文献をかつて調査した研究者のメモなどが当該文献とともに保管されていることもある。

1. 3 重ねられた文字の先後判定、下になった文字・抹消された文字の判読

2. 一冊・一フォルダとなった複製物の原装を確認する

石川武美記念図書館（旧 お茶の水図書館）蔵『節用文字』を例に、説明する（4）。

『節用文字』は、綴葉装（列帖装）である。これは、山田孝雄「徳富猪一郎氏蔵 節用文字解説」（一九三二年、古典保存会『節用文字』に所収）や川瀬一馬『増訂 古辞書の研究』（一九五五年十一月）で、言われている。山田は、次の如くに記す。

本書は縦八寸五分、横五寸三分、斐紙胡蝶装三折の本なり。第一の折は右翼八葉、左翼十葉を算す。こは恐らくはもと十枚を二折にせしが、その上部の二葉が脱せしものならむ。第二の折は十枚を、第三の折は九枚をいづれも二折にしたるものなるが、今、上より二所、絲を以て綴ぢたれば、十分に開きがたし。

一冊として刊行されている複製本の丁数で示すと、第一折は巻頭から18ウまで、第二折は19ウから37ウまで、第三折は38ウから55ウまでとなる。第二折が十枚の折であれば、一葉足りない。37ウの一葉は、原本では、後から足したもののように見られる。すなわち、第二折は、九枚の折（三十六頁）に半折一葉（二頁）を加えた全三十八頁である。

また、川瀬一馬は、本書が三筆からなることを指摘した（5）。

本文は三人の寄合書になり、巻首より「カ字」辞字部の二行目まで、即ち現存本で巻首の十葉までは頗る美事な筆蹟であつて、御物本傳行成筆和漢朗詠集の筆蹟に相似し、世尊寺流を完得した人の手になる事は一見明瞭である。恐らくは平安末期、二卷本色葉字類抄が編修せられた長寛元年から間もない頃に筆写せられたものと認められる。第十九葉以下は遙かに筆蹟が劣り、更に兩筆を以て書き継がれてゐる。即ち、第十九葉より第四十二葉裏六行目第二字「強^同アナカチ」まで一筆、同行第三字目「倍^同マシ馬」以下終末葉まで又別筆である。別筆の書継も同じ時に行はれたものである事は言ふまでもない。

指摘の通り、18ウ以前の第一折と19ウ以後の第二折とは別筆である。さらに、川瀬氏は、第三折42ウ六行目第三字「倍^同マシ馬」以下終末葉まで又別筆である」とした。折に完全には対応しない書写であるのはなぜか、不明である。しかし、川瀬の指摘の通りであると思われる。左の見出し漢字における糸偏・金偏・三水・言偏・弓偏・人偏を比較願いたい。

【第一折】（1オ〜18ウ）

（いずれも、古典保存会刊の複製本から引用した。）

還^{カラケ} （18オ5）

釧^{カチ} （18オ2）

津^{カス} （18ウ6）

越^{カス}許^カ （6ウ6）

弥^カ （10オ7）

俸^カ （7オ7）

【第二折】（19オ〜37ウ）

【第三折】（38オ〜55ウ）

↓以降別筆

絡^カ （19オ4）

鏡^カ 月 涯^カ 詰^カ 月 訖^カ 月

強^カ （42ウ6第二字・（別筆）第三字）

倍^カ （別筆）

（第三折）（38オ〜55ウ）

練^カ （46ウ6）

鏡^カ （49オ7）

訖^カ （51オ6）

彌^カ （51ウ2）

債^カ （51ウ2）

片仮名の字体も異なる。第一折の「カ」は、縦線がほぼ垂直である。第二・三折の「カ」は、

縦線を斜めに払う。また、第一折の「ツ」は三点がほぼ平行で、三点目も短い。第二・三折の「ツ」は、三点目を左斜めに払う。

右の如き書写者・書写時の差には、原装の折を区別せずに一冊とした複製本では気づきにくい。その現『節用文字』を、いつの言語資料として扱うべきかが、次の問題となる。

現『節用文字』には、次のような事象が見られる。

○仮名字体に院政末期の古体が残る。

○片仮名における「AB、、」型の踊り字を残す。これは、鎌倉時代以降見られなくなる形式である(6)。なお、第二折以降には、「、」が繋がったものがある。

○「く」型踊り字は、第一折は鎌倉初期、第二折・第三折は鎌倉中期〜後期の起筆位置である(7)。

○和語語頭の キ・イ・エ が歴史的仮名遣いと一致する(エの例は無い)。

○合拗音の クキ・クエをキ・ケ・クイ・クエ とする例が無い。

○類音字による拗音注を全五例ながら(「鬼反・元反・尺反・生反・京反」残す(8))。

○加点されている声点がアクセント体系変化以前のものであり、2拍動詞第二類二拍目に平声軽位置の声点加點例が有る(9)。

〈登〉ナル(平平軽)(50ウ1)「成る」の意

○同じく、和語に去声点が見られる。

(ただし、これが拍内上昇調を示していたとは考えていない。)

〈鉸〉カコ(平去)(16ウ4) 〈嫁娶〉トツク(去上平軽濁)(23ウ2)

右には、第一折〜第三折の区別無く、全体的に見られる事象が有る(10)。

以上から、現『節用文字』は、院政末期の原本を、第一折は鎌倉初期に、第二折・第三折は鎌倉中期〜後期に書写したものである(11)、と考えられる。

結局、現『節用文字』は、書写の誤り・省略・書写時の言語事象の混入を考慮しつつ、院政末期の言語資料とすることができる、というのが現時点における発表者の考えである。

三、むすび

情報通信技術(ICT)の進展によって、これからの日本語史研究は、これまで使われなかった資料をも活用した研究になると思われる。

国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」は、「医学・薬学・理学(和算)・農学・防災環境・生活文化など、異分野融合研究の可能性の高い分野や、社会貢献などの諸条件を考慮して画像を作成し、共同研究と連動しようとするもの」である(12)。一方、日本語史研究は、「古典文学の補助学」と言われていた流れを完全には脱しておらず、古典文学大系等収載作品を主対象とする研究がいまだ中心のように見られる。今後は、国外現存資料を含め、文字資料全体を対象とした研究がさらに進行するものと推測される。その膨大な文献を研究対象とするために、原本画像からまずコンピュータにキーワードを探させることも、増えるであろう(13)。

しかし、利用の便のため階層化され・整えられた複製物から、原本の姿を捉えることは難しい。研究環境がいかに変化しようと、原本に触れなければわからない事柄は残る。

原本所蔵者が原本閲覧に引き続き御理解・ご協力くださるよう、研究者も努力する必要がある。将来に亘って原本が保存され、原本に依拠した言語研究が途絶えないことを祈っている。

注

- (1) たとえば、国立国語研究所が公開している「日本語歴史コーパス」は、Japan Knowledge の『新編日本古典文学全集』本文画像へのリンクを開始した(二〇一五年三月末)。これによって、「日本語歴史コーパス」を用いて見出した例外的な例を、底本テキストおよび底本画像で確認できるようになった。他文献についてもこの画像リンクが進めば、文字史・音韻史・語彙史・文法史等の研究に資するところが大きい。
- (2) 佐々木勇「新訳『大方廣佛華嚴經』音読史における喜海撰『新訳華嚴經音義』の音注」(「訓点語と訓点資料」136輯、二〇一六年三月)では、この画像で判読可能な訓点を活用した。
- (3) 卷子であれば、ほぼ等距離に虫損がある(巻末・軸に向かって虫損の間隔が狭まる)。↓小助川貞次「影印本環境における訓点研究の問題点」(「富山大学人文学部紀要」第64号、二〇一六年二月)、参照。また、折本・帖装本は、折り目から左右対称に虫損が現われる。
- (4) 佐々木勇「書評」二戸麻砂彦著『節用文字の音注研究』(「日本語の研究」12巻3号、二〇一六年七月)、同「古典複製本使用上の注意」(広島大学学術情報リポジトリ)、参照。
- (5) 川瀬一馬『増訂 古辞書の研究』(一九五五年十一月)三二二・三二三頁。
しかし、後に川瀬は、見解を変える。
行成風の筆蹟を習得せし達筆漆黒の墨色にて書写せるも、巻末に至りて稍筆力鋭鋒を収めたる書き様となりて、第四十二葉裏六行三字以下は、門流の別筆かと思わるる程なれど、恐らく原本の書体によく倣い筆運びの適いたる部分と、次第に自己流の書き様に陥りたる書写相の相違なるべしと推せらる。(略)川瀬著「古辞書の研究」(三二二ページ)参照。「なお拙著には複製本に拠りて三筆寄合書と見たるは非なり。」
(川瀬一馬『新修成實堂文庫善本書目』(一九九二年)100頁)。
- (6) 中田祝夫『古点本の国語学的研究 総論篇』(一九五四年、勉誠社)第四編第二章(その三)、参照。
- (7) 小林芳規「踊字の沿革續貂」(「広島大学文学部紀要」27巻1号、一九六七年十二月)、同「中世片仮名文の国語史的研究」(「広島大学文学部紀要」特輯号3、一九七一年三月)、参照。
- (8) 小林芳規「訓点における拗音表記の沿革」(「王朝文学」9、一九六三年十月)、参照。
- (9) ただし、拍内下降調を示していたとは考えられない平声軽位置の声点も存するため、単なる加点のずれかもしれない。
(嫁娶) トツク(去上平軽濁) (23ウ2) (冠) ツフ(上平軽濁) (42ウ5) 「「禿ぶ」の意」 (2・3 拍動詞第一類) (攤宿) タスク(上濁平平軽) (30オ6)
- (10) ただし、反切・類音字注・「(仮名) 反」の音注は現存本第一折に集中している。書写底本に全体的に存したものであれば、第二折以降では書写の際に省略されたことになる。
- (11) 第二折の途中から始まる第三筆は、後の書写ではなく、次世代の者による同時の書写なのかもしれない。なお、後補の見出し字および訓点は、全体に存す。たとえば、第一折14オ6行末「狩人カリ／ウト」は、後補の文字である。
- (12) 山本和明「大型プロジェクトの進捗状況について ―基盤整備・機能強化の側面より―」(「リポート笠間」59、二〇一五年十一月)。国文学研究資料館の同プロジェクトホームページも参照。
- (13) 「典籍画像からのテキスト化とキーワード抽出に関する研究」(研究代表者：寺沢憲吾)、函館市中央図書館所蔵「文書画像検索システム」<http://records.c.fun.ac.jp/> 参照。